

非名・没名・無名

——現代社会における匿名性の諸相——

小 川 博 司

序 匿名性への注目

匿名という言葉からは、日常的な用語の水準では、新聞やラジオへの投書の「匿名希望」が連想されるだろう。社会の学では、匿名性(anonymity)は、最も一般的には、大衆社会論的文脈で、都市社会やマス・コミュニケーションにおける人間関係の特徴を表わす用語として用いられている。しかし、匿名性という用語を用いずとも、根源的な社会の学は、いずれも匿名的なものについての考察を含んでいる。それは、とりもなおさず、社会とは、固有名をもった人間個体が、匿名的な存在となるところに存立するからである。匿名性は、社会の学の古くからのテーマである、類と個、社会と個人の対を結びつける、鍵となる概念なのである。

本稿は、まず広く匿名的なものに注目し、匿名性を論理的にときほぐし、その諸相から現代社会における人間の存在様式を描き出そうとする試みである。それでは匿名性はどのようにときほぐされ、どのような諸相に分節化されるのか。

第一に、社会・文化的制度(言語も含まれる)のもつ匿名性、第二に、特定の機能の遂行者のもつ匿名性、第三に、「知られていない」という意味での匿名性、の三相を指摘することができる。それぞれの相は、相互に密接な関連をもってはいるが、それぞれ異なった位相として論じることができる。本稿では、以下それぞれの相の匿名性について、非名性・没名性・無名性という用語をあてることにする。また、故意に名前を匿すという意味での匿名は、「匿名」と「 」をつけて記すことにする。

本稿では、このような用語を用いながら、現代社会の人間の存在様式を描き出そうとする。本稿における現代社会への接近法とその記述の仕方は、以下のような特徴をもつはずである。

第一に、考察は、まず、人間により生きられる世界から出発するのであり、概念的な世界から出発するのではない。現実を構成し、経験している人間に、まず注意を向ける。即ち生活世界論的な考察を行う。

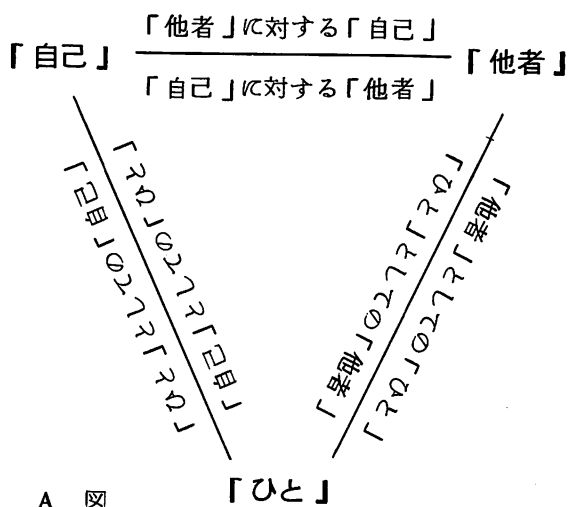
第二に、現代社会についての共時的な記述である。非名性・没名性・無名性の三相の複合体として、現代社会をとらえようとするのである。その成果は、現代の個別の社会的・文化的諸現象を具体的に考察する際の、また理論化の作業を進めていく際の、土台となるようなものでありたいと思っている。

第三に、「社会学の社会学」のための基本的な作業としての性質をもつ。匿名性に注目することの結果として、社会への多様な接近法の配置図が浮き彫りにされるだろう。即ちある理論が何を前提にして、人間の存在様式のどの相を扱っているのか明らかになるだろう。

I 非名性

§ 1 生活世界と〈人〉

- 1.1.1 生活世界 (Lebenswelt, life-world) (注1) は、社会学者により構築される概念的な世界ではなく、それ以前の、人間により生きられる世界である。それは、人間=登場人物が、現実 (reality) を経験し、同時に構成する現場=舞台である。
- 1.1.2 生活世界は、身体的存在かつ意識的存在である人間の二相性に対応して、作業 (working) の世界 (Schutz [1962:212]) と意味の世界の二相的構造をなす。生活世界における、現実の構成・経験は、作業の世界と意味の世界の同時性においてなされる。
- 1.1.3 生活世界の考察には、生きられる時間・空間についての分析が含まれる。生きられる時間・空間とは、概念的で、数量化が可能な時間・空間以前の、生活世界の登場人物により、現実に生きられる時間・空間である。(注2)
- 1.1.4 生活世界の登場人物は、固有名をもった特定の存在である以前に、まず非人称的な存在=〈人〉である。〈人〉は、身体的存在としての人間に由来する相=「ヒト」と、意識的存在としての人間に由来する相=「ひと」に分けて考察することができる。
- 1.1.5 生活世界の登場人物は、身体的感覚・運動の相において、未分化な匿名的存在=「ヒト」である。人間諸個体は、「同じ一つの間身体性 (intercorporeité) の器官」(Merleau-Ponty [1960=1970:18]) なのである。
- 1.1.6 人間個体が、他の個体と出会う時、個体内部においては、「自己」「他者」「ひと」の三項間の動的な相互鏡映過程が進行している〔A図〕。生活世界の登場人物は、意識・言語的な相においては、「ひと」という観念を相互に介して出会う。生活世界の登場人物は、意識・言語的な相においては、間主観性の諸項としての「ひと」なのだといえよう。
- 1.1.7 生活世界の登場人物たちは、「ひと」という観念を保持することにより、「ひと」を主語にした諸規範を内在化させることができる。それらは、通常 of 社会生活を営んでいく上での諒解であり、同時に強制である。「ひと」を主語にした諸規範は、日常的に用いられる言語そのものに含まれている場合から、法律のように、言語により新たに表明される場合まで、諸層をなしている。(注3)
ここに諸規範が自明視される「常識



の世界」が成立する。「ひと」でない人物は非「常識の世界」の人物として処理される。「常識の世界」と非「常識の世界」の境界は、きわめて相対的で、任意的である。様々な単位の社会の、様々な次元に、様々な「常識の世界」がある。

- 1.1.8 「ひと」でない人物には、二つの場合がある。「ひと」観念そのものを獲得していない場合と、「ひと」観念は獲得しているが、現実支配的な「常識の世界」とは異なった諸規範を内在化している場合とである。子供は前者の例であり、異邦人は後者の例である。
- 1.1.9 生活世界の登場人物は、「ヒト」と「ひと」の統一体としての〈人〉の相に帰属しているといえる。「ひと」を主語にした諸規範も「ヒト」の相と結びついて初めて、現実的なものとなる。
- 1.1.10 一般に社会化といわれる過程は、「ヒト」の相をもつものとして生みこまれた個体が、「ひと」の観念を獲得し、「常識の世界」を形成する一員となることである。
- ① 第一次社会化は、一連の「重要な他者」との相互作用を通じてなされ、「一般化された他者（およびそれに伴ういっさいの事柄）についての視点が個人の意識の中に確立されたとき、終了する」。(Berger & Luckmann [1966=1977:232])このG.H. Mead的な意味で用いられている「一般化された他者」こそ、ここでいわれている「ひと」に相当する。この時、社会化の候補者は「ひと」としての「自己」であり、「自己」としての「ひと」であるような、「自己」と「ひと」の相互鏡映的な過程を内在化させることができる。これは自我の確立を意味する。
- ② 第二次社会化は、「ひと」を主語にした「常識の世界」の諸規範の絶えざる内在化の過程である。
- 1.1.11 生活世界の登場人物はすべて〈人〉の相に帰属している。その中でも、とりわけ「常識の世界」を形成する〈人〉の匿名性を非名性と呼ぶ。
- 1.1.12 「常識の世界」は、この世界に生みこまれた人物にとって所与ではあるが、生活世界の登場人物たちの、実践的・現実的な相互作用の内に、変改の可能性を含みつつ、維持されていく。
- 1.1.13 「常識の世界」の存立の根本には、人間の「カオスからの脱却の志向」がある。(注4)他方、「常識の世界」と非「常識の世界」の境界線上には、逆に「カオスへの志向」がある。それは「遊」の要素といってもよい。(注5)

§ 2 類型化と役割

[類型化一般]

- 1.2.1 生活世界の登場人物は、類型化 (typification) によって自らの現実を構成している。そしてその現実こそが、登場人物により経験される現実である。類型化とは、現実の構成と現実の経験との接点に位置する過程である。

- 1.2.2 対象の類型化は、自己の類型化を伴い、うらはらをなしている。対象の経験の仕方・構成の仕方は、対象への志向性の質により異なってくる。
- 1.2.3 対象への志向性のあり方には、理想的には二つの極が想定される。対象に対して「汝」として関係する場合と、「それ」として関係する場合とである。(注6)前者が、特殊性・特定性・唯一性・一回性といった特徴をもつのに対し、後者は、一般性・抽象性・代替可能性・反復可能性といった特徴をもつ。実際の類型化は、通常、これら志向性の質の両極の間を揺れ動く運動として生ずる。

[人間の類型化]

- 1.2.4 他者を類型化することは、常に自己を類型化することと同時になされる。ここには「ひと」の観念が介在する。類型化は、身体的活動を通して得られる新しい知識(注7)により、修正されつつ進行する過程である。個体内部での鏡映的な過程と身体的活動は絡み合い、動的に展開する。
- 1.2.5 次に個体間の相互類型化の場合に移る。個体間の相互類型化という動的な関係の中で、それぞれのその時々々の役割が演じられていく。実際の場面では、一対一の個体間相互類型化を基本単位にして、多数の登場人物の間での複雑な相互類型化がなされ、諸役割が演じられる。
- 1.2.6 生活世界の登場人物は、常に他者との関係の網の中で、「誰かとして」の役割としてしか生活していない。(注8)本来的「自己」というものから抜け出して「誰かとして」ふるまうのではなく、常に「誰かとして」ふるまうのである。
- 1.2.7 人間の類型化には、他者への志向性の質により、二つの極がある。人格的類型(personal types)と機能的類型(functional types)である。人格的類型とは、他者に対して、かけがえのない(unique)「汝」として関係する時に形成される類型である。機能的類型とは、他者を、ある機能を果たす者として、かけがえのなさ(uniqueeness)が全く失われた代替可能な者として、経験する時に形成される類型である。これら是对極であり、実際の場面では、他者が経験されるのは、人格的類型と機能的類型の間を揺れ動きながら進行する、類型化の過程としてである。(注9)

§ 3 生活誌

- 1.3.1 生活世界の登場人物は、多重的・時系列的に諸役割を演じていく。その後には諸役割の軌跡が残る。この諸役割の軌跡についての主観的構成物を生活誌(biography)(Goffman [1963=1970:104])と呼ぶ。個別の登場人物にとって、自己に直接かかわる生活誌には以下の三種ある。
- ① 自己が自己について綴る生活誌
 - ② 自己が他者について綴る生活誌
 - ③ 他者が自己について綴る生活誌

- 1.3.2 生活世界の登場人物は、未来において、どのような諸役割を演じていくかの計画をしている。それを生活歴設計(life-plan)(Berger, Berger & Kellner [1973 → 1974 : 69 = 1977 : 80])と呼ぶ。
- 1.3.3 生活世界の登場人物は、過去の解釈的構成(生活誌)と未来の構想的構成(生活歴設計)の接点である現在を生きる。
- 1.3.4 通常、他者の生活誌的知識は、その他者の固有名と身体に結びついている。生活誌的知識は、固有名或は身体をインデックスにして動員される。
- 1.3.5 ある特定の社会・集団に属するということは、ある特定の固有名の命名体系に従うということを含んでいる。命名はその社会・集団への帰属を要請する一つの重要な回路である。
- 1.3.6 非近代的な共同体社会においては、個別の生活誌・生活歴設計は、共同体の生活の中に埋没し、各成員には主題化されていない。近代社会では、成員各自は、個別の生活誌・生活歴設計を主題化している。人間個体は、自らの生活誌を綴り、生活歴設計を行なう主体である。即ち自らの人生の主人公である。
- 1.3.7 近代社会では、固有名は、個性(uniqueness)の表象と考えられている。それは各個人の個性と固有名が直接的・実体的に結びついているからではない。固有名が個人のインデックスになっているという事実と、個人が個性をもつという理念とが結びついて、「常識の世界」の中の〈人〉に、そのように諒解されているにすぎない。

Ⅱ 没 名 性

以下の論議の舞台は、個体が共同体の地縁・血縁から解き放たれ、個別の生活誌を綴り、個別の生活歴設計を行うことを主題化しているような社会である。

没名性の相については、既に多く論じられているので、本稿においては、没名性への視点を簡潔な形で示し、それに基づき、現実の社会における諸現象を整理するにとどめる。

§ 1 没 名 性 へ の 視 点

- 2.1.1 個別化とは、人間個体が個別の生活誌を綴り、個別の生活歴設計を行う主体となるということである。
- 2.1.2 個別化された個人が、人格的類型として類型化される時、その個人は個性(uniqueness)をもっているといえることができる。
- 2.1.3 個別化された個人が個性を捨象され、機能的類型として類型化されることを没名化という。没名性とは、没名化された状態をいう。
- 2.1.4 近代社会は、個別化と没名化との二側面をもつ社会である。近代人は個別性と没名性の二重性を生きている。

2.1.5 没名性を前提とした上で、個性の実現をはかることを人間化という。人間化により実現されるのは、擬似的個性＝「個性」である。

2.1.6 個別化と没名化に人間化の要素が加わっているのが、現代社会の顕著な特徴である。

§ 2 没名性の諸局面

2.2.1 没名性の諸局面について、没名化と人間化という枠組で整理すると、B図のようになる。
(注10)

関係	主題	没名化	人間化
自然－人間	a. 機械の自立	(道具→) 機械 (機械工業)	オートメーション化
	b. 機械論的 自然観	機械論的自然観	機械論的自然観の見直し
人間－人間	a. 商品交換	経済的没名性 販売者 — 購買者	
	b1. 工業生産	大量生産 生産者 — 消費者	製品の多様化 広告による「個性」化
	b2. 工業生産 (工場内)	(ギルド→) マニファクチュア 作業者 — 作業者	人間工学 (組織化の技術)
	c1. 官僚制	道義的没名性 官僚 — 市民	諸部門の連携化
	c2. 官僚制 (組織内)	道義的没名性 官僚 — 官僚	人間工学 (組織化の技術)
	d. 代表民主制	代表民主制 代表 — 有権者	代表の「個性化」
e. マス・コミュニケーション	活字の出現 送り手 — 受け手 ① 党派性ジャーナリズム → 客観報道主義 ② 送り手・受け手の互換性 → 送り手・受け手の固定化 ③ メッセージの個別性 → 画一化	ニュー・ジャーナリズム アクセス権 多様化	

B 図

- 2.2.2 ここで注意しなくてはならないのは、没名化は、「理論によってなされるのではなく、現実そのものによってなされる」(Kosik [1967=1977:103])ということである。即ち、生活世界の登場人物の現実の構成という営為により現実的なものになるのである。例えば経済的諸関係についていえば、生活世界の登場人物は「経済的諸関連に入るやいなや——彼の意志と意識とは無関係に——諸関連と諸法則性へと引き入れられ、そのなかで、彼はホモ・エコノミクスとして機能する」(Kosik [1967=1977:103])のである。ここでいわれている「彼の意志と意識とは無関係に」とは、そこでの活動を主観的にどのように意味づけようとそれとは無関係に、という意味であり、自己没名化(self-anonymization)の意識作用は強制されるのである。即ち、経済の諸法則は、現実的・実践的な強制として、強固な非名性の層をなしているといえよう。他の諸関係においても、事情は同様である。役割を形成する動的な過程は、諸関係の網の中に組み入れられ、登場人物は没名的な諸役割を演じることを余儀なくされるのである。
- 2.2.3 Marx の商品の物神的性格についての議論は、経済的諸関係における没名性の強制が、非名性の層をなしている事態の指摘であるといえよう。また、Georg Lukacs に代表されるような、商品の物神的性格についての議論から出発した物象化論は、より広い局面についての没名性と非名性の両相に関する議論であるといえよう。この点で、単に非名性の相しか指摘していないBergerらの物象化論とは性格を異にしている。

§ 3 生活世界の複雑化

- 2.3.1 非近代的な共同体社会においても、生活世界の登場人物は、様々な場面で様々な役割を演じている。しかし、共同体に埋没している個々の人物は、社会的世界の諸場面すべてを含む「一つの統合的意味秩序」の下に役割を演じているにすぎない。
- 2.3.2 現代社会においては、生活世界は様々な独立的な意味領野に、モザイク状に細分化している。
- 2.3.3 現代社会においては、公的領域＝労働或は生産に関係する領域と私的領域＝享受或は消費に関係する領域の区分が鋭く意識されている。(注11)この区分は、根底的には、生産手段を持つ者と持たない者との分離に基づいている。
- 2.3.4 公的領域内部では、労働の分業の進行により、無数の細分化された独立的な意味領野が生まれ出される。登場人物は自らの専門以外の、細分化された諸領野に接触することを余儀なくされる。(Berger, Berger & Kellner [1973→1974:63-64=1977:72])しかも、そこで演じられる諸役割は没名的であることが多い。
- 2.3.5 現代社会の生活世界の登場人物の自由とは、第一に、公的領域においては、所与の没名化されたモザイク状の諸役割のなんらかのセットを選択するか、もしくはすべてを選択しない自由である。第二に、私的領域においては、私生活の世界を構築する自由である。私的領域は個別の生活の主題となる。

- 2.3.6 生活世界全体からみれば、公的領域における没名化、私的領域における人間化という分化がみられる。
- 2.3.7 現代社会においては、公的領域と私的領域の区分が鋭く意識される。ここに、「それぞれの領域に応じて諸役割を演じ分けていく」という意識が生まれる。更にそれぞれの領域内部はモザイク状に細分化し、それぞれの場面に応じて諸役割を演ずることを余儀なくされる。ここに「それぞれの場面にに応じて諸役割を演じ分けていく」という意識が生まれる。その意識は、生活世界全体を支配する。
- 2.3.8 都市は、生活世界のモザイク状の細分化が空間的に保障される地である。
- 2.3.9 マス・コミュニケーションは、都市においてまず成立する「それぞれの場面にに応じて諸役割を演じ分けていく」という意識の普及に寄与する。またマス・コミュニケーションのプログラムそのものもつ複数性・モザイク性は、複数性・モザイク性の意識の醸成に寄与する。
- 2.3.10 都市化とマス・コミュニケーションは、更に、生活世界における知名のあり方を複雑にしており、生活世界を複雑化し、生活誌—生活歴設計をより複雑にする。(注12)
- 2.3.11 アイデンティティーの危機・喪失が社会的に問題とされる背景には、このような生活世界の複雑化がある。それは、没名的なモザイク状の諸役割を演じていかななくてはならないという側面と、明確な役割形成が困難であるという側面(無名性と関連)の両面と関連しているといえるだろう。

Ⅲ 無 名 性

匿名性の第三の相—無名性は、生活誌的知識をめぐる相である。それは、没名化に対抗する人間化と密接に関連している。

§ 1 知名の諸相

- 3.1.1 「AがBを知名である」とは、AがBについての生活誌を綴っていること、つまりBをなんらかのインデックスにより同定し、Bについての、なんらかの生活誌的知識を動員することができることである。この場合、A、Bは個体であってもよいし、集団であってもよい。インデックスは名前もしくは身体である。名前には、本名、通称や変名(芸名やペン・ネーム)、記号が含まれる。身体には、容貌、身体的動作、身体的属性(例えば指紋、血液型)、身体的動作の結果が含まれる。
- 3.1.2 知名のあり方には、他者との知名の方向性により、以下の三つの場合がある。
- ① 相互知名的関係(相互に知名である場合) ……非近代的な共同体は、一つの「相互知名的世界」を形成している。近代社会においては、「相互知名的世界」は複数化し

ている。

- ② 有名-無名関係（知名が一方通行的な場合）……有名-無名関係は近代社会において顕著である。有名-無名関係は、マス・コミュニケーションやコンピュータに代表されるような、知識の伝達・蒐集・保存・処理の技術の発達・普及に、その存立の基盤を置いている。例えば、マス・コミュニケーションの送り手と受け手は、有名-無名関係にある。また、市民の個別の生活誌的知識を蒐集している行政組織と市民とは、有名-無名関係にあるといえる。この場合、有名なのは市民の方である。
- ③ 相互無名的関係（相互に知名でない場合）……近代社会は広大な「相互無名的世界」を宿している。相互無名的関係は、第一に都市化、第二にマス・コミュニケーションにその存立の基盤を置く。マス・コミュニケーションは、送り手と受け手との間に有名-無名関係、受け手と受け手の間に相互無名的関係を内包している。

3.1.3 個人の生活世界は、知名のあり方により、主観的に次のように分割される。

- ① 〈相互知名性の世界〉（私たちはお互いに知名である）……近代社会においては、個人は複数の〈相互知名性の世界〉を経験しており、それぞれの世界の間関係も複雑である。
- ② 〈有名性の世界〉（私は誰かに知名であるとされているが、私はその誰かを知名ではない）……例えばマス・コミュニケーションの出演者は〈有名性の世界〉を経験していることになる。
- ③ 〈無名性の世界〉（私について知名である者はいない）……無名性とは、他者による自己についての生活誌のない状態のことをいう。これが匿名性の第三の相である。個人にとって〈無名性の世界〉は、有名-無名関係、相互無名的関係の中で経験される。マス・コミュニケーションの受け手は、送り手からも、他の受け手からも知られていない。

〈相互知名性の世界〉〈有名性の世界〉は、他者による自己についての生活誌がある世界であり、「顔を立て」(save face)(King [1975:37])なくてはならない世界である。それに対して〈無名性の世界〉は、他者による自己についての生活誌のない世界であり、「顔を立てる」必要がない世界である。そこで演じる諸役割には直接的なサンクションが伴わない。そこは自由に新たな役割を創造しうる世界として、「誰でもない世界」であり、「本来の自分を取り戻せる世界」として、意識される。この意味で、〈無名性の世界〉は「遊」の要素が強い。〈相互知名性の世界〉〈有名性の世界〉が「常識の世界」の内での役割遂行を促すのに対し、〈無名性の世界〉は「常識の世界」を脅かす。

- 3.1.4 実際の場面では、これら三世界が明確に区分されうるわけではない。むしろ、この三世界の絡み合いが、生活世界を複雑にしているのだといえる。例えば、家族と一緒にTVを見ている時、〈無名性の世界〉を経験していると同時に〈相互知名性の世界〉を経験しているのである。各個人は、それぞれ独自の境界と内実、絡み合いをもつ、三世界

をもっている。

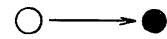
§ 2 現代社会の相互無名的関係

- 3.2.1 相互無名的関係は、現代の生活世界の登場人物たちの関係の仕方に独特の性格を与える。私的領域における私的世界を構築する自由は、相互無名的関係により現実的に保障される。
- 3.2.2 相互無名的関係における相互類型化の中で生ずる「ひと」は、根無草的な「ひと」である。そのような「ひと」に基づく非名性は「『ひと』は『ひと』に従わねばならない」という同義反復的な諒解・強制である。このような「ひと」は、生活世界の登場人物にその時々、同調性を促す。(注13)
- 3.2.3 「相互無名的世界」においては、同調性を前提とした、些細な差違の体系としての「個性」(注14)が発現される。そこでは、根無草的な「ひと」と諸「個性」の間で、相互鏡映過程が進行する。この世界の登場人物は、特定の他者の生活誌を綴ろうとしない(他者に無関心)が、同時に無名の他者たちのまなざし(見田[1973])に敏感である。その気遣いが「個性」を発現する態度である。
- 3.2.4 「相互無名的世界」の典型は、都市的空間とマス・コミュニケーション空間である。

§ 3 現代社会の有名-無名関係

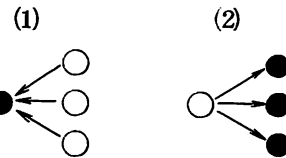
- 3.3.1 知名の一方通行は、基本単位としては、一(個体或は集団)対一(個体或は集団)の関係において把握されうるものである〔C図〕。
- 3.3.2 知名の一方通行は、その一方通行が一對一に閉ざされてしまう場合と、一對多への広がりをもっている場合がある。一對多の知名の一方通行には、①多から一への方向と、②一から多への方向の二方向がある〔D図〕。
- 3.3.3 更に、多の間での知名のあり方(a:相互知名的か、b:相互無名的か)を考慮に入れると、一對多の有名-無名関係は四つの典型に区分される〔E図〕。現代社会においては、①-b、②-b

矢印は知名の方向性を示す

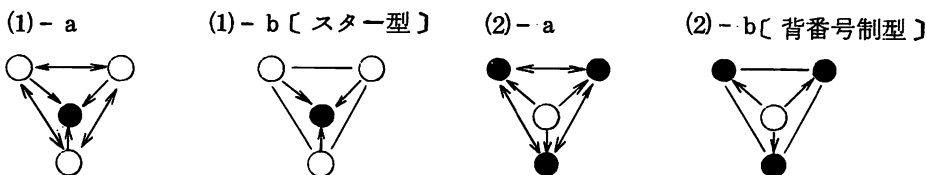


無名 有名

C図: 一對一の有名-無名関係



D図: 一對多の有名-無名関係(I)



E図: 一對多の有名-無名関係 (II)

の相互無名的関係を前提とした有名-無名関係が顕著であり、両方向の知名の一方通行が位相を異にしてすれ違っている。更に、一対多の一は、通常没名的な成員から成る組織である。

①-b: スター型の有名-無名関係

意識産業 (Enzensberger [1962 → 1964 = 1970]) としてのマス・コミュニケーションは、大量生産商品を「個性」化する任を負っている。

マス・コミュニケーションは、送り手側が通常没名的な成員から成る組織であるために、受け手側は、実際、送り手を特定の人物として指摘することはできない。しかし、送り手の側には、無名の組織人たちの前面に、一群の有名人たちがいる。

現代社会においては、産業化されたマス・メディアにより有名人が生涯され、無名人の私的領域=消費生活において、「個性」のシンボルとして消費される。有名人の「個性」は公的領域と私的領域の二重性を克服する契機を与えられていることにより保障されている。有名人の生産と消費という構造は、芸能人やプロ・スポーツ選手ばかりでなく、公権力にたずさわる政治家、その他あらゆるジャンルの人々を貫く。そしてこの有名人の「個性」が私的領域における相互無名的で根無草的なマス・コミュニケーションの受け手たちの操作(注15)を担う。流行現象はその典型である。

②-b: 背番号制型の有名-無名関係

没名的成員から成る個別の組織は、その関連する、即ちそれが影響を行使しようとする、組織内及び組織外の諸個人の生活誌的知識を蒐集する(例:警察の犯罪者リスト、企業の顧客名簿)。それは当組織にとって、関連する諸個人を管理するために必須の作業である。

他方、諸個人は、それによって、より迅速で、的確で平等なサービスを受けることができる。

この時、諸個人は没名化されている。コンピューターの導入は、没名化された諸個人についての膨大な量の知識の蒐集・保存・処理を可能にする。

各部門で蒐集された知識の連絡、統合は、諸個人に、より迅速で、的確で平等なサービスを提供すると同時に、組織による諸個人の管理に役立つ。

ある社会の成員の全数についての、広範な生活誌的知識を、一つの組織(各部門別の単位組織は実質上一つに結ばれる)が保持し、処理できるような事態とは、個人、社会にとって何を意味するか。一個人は、計測的な手続きにより蒐集された知識から成る、モザイク的全体が把握されることになり、生活世界のうちで自由の残されているとされる私的領域までもが管理の対象になる。社会全体についてみれば、全成員のモザイク的全体が把握され、社会の全般的操作(Kosik[1968])が可能になる。そしてこの管理・操作は、諸個人が相互

無名的関係にあることが前提となる。

- 3.3.4 現代社会においては、相互無名的関係により保障される自由、「個性」の発現を前提とした上での有名-無名関係の中で、諸個人の管理・操作がなされる。

§ 4 現代社会の「匿名」・変名

- 3.4.1 故意に自らの名前を匿すことを「匿名」という。対語は記名である。故意に本名と異なって称せられた名前を変名という。
- 3.4.2 自ら自己の名前を匿したり、新たに命名するということは、自己をある社会関係の中に位置付けることになる。現代社会における「匿名」・変名は戦略的である。
- 3.4.3 「匿名」・変名の戦略は、〈無名性の世界〉における自由に関連している。
- ① 「遊」の世界への参加の自覚としての「匿名」・変名（例：ラジオの深夜放送への投書の「匿名」・変名）
 - ② 「常識の世界」への異議申し立ての拠点としての「匿名」・変名（例：新聞への投書の「匿名」、内部告発者の「匿名」、ゲリラの「匿名」）

結 「匿名性の社会学」の課題

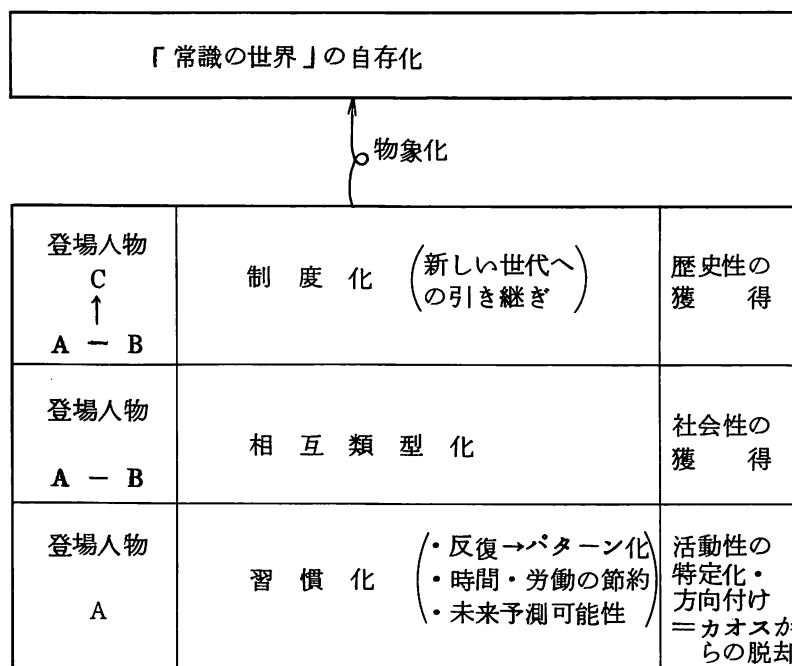
以上、匿名性の諸相を素描してきた。この「匿名性の社会学」の試みは、その端緒についたばかりである。

- 4.1 「匿名性の社会学」には次のような課題が残されている。
- ① 生活世界論の精緻化
 - ② 演劇論的モデルの検討
 - ③ 没名性と非名性の関連
 - ④ 没名化と操作・管理
 - ⑤ 生活誌的知識と操作・管理
 - ⑥ 知識の分配と操作・管理
- 4.2 「匿名性の社会学」は、社会構想に寄与するであろう。その場合、以下の項が鍵となるだろう。
- ① 相互知名的世界の形成による没名化の克服（コミュニティ、コミュニケーション）
 - ② 相互無名的世界における自由（の保障）

付 記： 本稿は、筆者の修士論文『現代社会における匿名性の諸相』（1978）に基づいている。全体の構想を示すことに意義があると思われたので、このような形に書き改め、まとめた。

—注—

- (1) 生活世界の概念はHusserl による。生活世界の概念がHusserl からA.Schutz らの現象学的社会学派に、如何に引き継がれたかは、吟味する必要がある。
- (2) 生きられる時間については、E.Mincowski、また生きられる空間については、O.F.Bollnow の概念を借りている。生きられる時間・空間は、具体的な時間・空間であることもあるし、抽象的で数量化可能な時間・空間であることもある。
- (3) N.Luhmann によれば、「制度を担うのは、見知らぬ匿名の第三者の、推測される意見である。直接の見物人は、みずからは決して姿を見せることのない主人の道具としてのみ機能する。」(Luhmann [1972=1977:77])とされる。この「匿名の第三者」こそ「ひと」に相当しよう。
- (4) 「常識の世界」の存立については、P.L.Berger らの制度化の構造と物象化の理論を援用することができる〔F図参照〕。



F 図 Berger and Luckmann [1966=1977] より作成。

- (5) 井上俊は、「聖=俗複合体として存在している既成の支配秩序を相対化し、的確に批判するパースペクティブを提供する」(井上[1977:155])うえて、「遊」の世界が重要な役割を果たしていることを指摘する。本稿では、「聖」-「俗」図式はとらないが、「遊」の世界についての問題意識は井上に近い。
- (6) 「汝」と「それ」の対比は、M.Buber による対比がヒントになっている。
- (7) 本稿では、知識をきわめて広義に用いている。それは、一般に用いられているデータ、情報、体系としての知識まで含むものとして用いられる。

- (8) ここでの役割概念は、Linton,Parsons 以来、一般化している「地位」との関連で語られる「役割」概念とは異なる。それ以前の水準における役割であって、廣松渉の役柄(廣松〔1972〕)に近い。
- (9) 人格的類型と機能的類型の対は、Schutz の概念を修正して用いている。(Schutz & Luckmann〔1974〕)
- (10) 生きられる時間・空間の抽象化については省略した。没名化・人間化という用語は、語の定義より、自然と人間の関係の抽象化には、適用できないが、人間と人間との関係に対応するように、類推により、このように整理した。
- (11) 近代社会の理念としては、公的領域=公権力領域(国家・宮廷)、私的領域=民間領域と区分される。Habermas は、公的領域と私的領域の区分の移行を、「公共性の構造変換」としてとらえている。
- (12) E.Goffman の演劇論的社会学は、このような複雑化した生活世界がその舞台となっている。そこに登場する人物は「何ごとかを行なおうと試みるのではなく、何ものかであろうと努める」(Gouldner〔1970=1975:51〕)のような人物である。
- (13) M.Heidegger の das Man は、相互無名的関係における「ひと」によく似ている。また、E.Fromm の「匿名の権威」は、この「ひと」のもつ権威に相当しよう。D.Liesman の「他者志向型」は、「相互無名的世界」の登場人物の、「ひと」に依存的な社会的性格を表現したものとといえるだろう。
- (14) 「個性」は本来の個性とは異なる。(2.1.5を参照)
- (15) 操作・管理は、ここでは、人格的に対等な関係の者の間における、支配の技術として位置づけられている。

文 献

- Berger,Peter L.& Luckmann,Thomas 1966 The Social Construction of Reality : A Treatise in the Sociology of Knowledge,Double-day & Co.Inc.;=1977 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社.
- Berger,Peter.L.,Berger,Brigitte and Kellner,Hansfried 1973 The Homeless Mind,Random House;→1974 Pelican Books;=1977 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳『故郷喪失者たち』新曜社.
- Bollnow,Otto Friedrich 1963 Mensch und Raum,W.Kohlhammer;=1963 大塚恵一・池川健司・中川浩平訳『人間と空間』せりか書房.
- Buber,Martin 1958 Ich und Du,Lambert Schneider=1958 野口啓祐訳『孤独と愛—我と汝の問題—』創文社.
- Enzensberger,Hans Magnus 1962→1964 Einzelreiten I Bewusstseins Industrie,Suhrkamp Verlag;=1970 石黒英男訳『意識産業』晶文社.

- Fromm, Erich 1955 The Sane Society, Rinehart & Company, Inc.; = 1958 加藤正明・佐藤隆夫訳『正気の社会』社会思想社。
- Goffman, Erving 1963 Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity, Prentice - Hall, Inc.; = 1970 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房。
- Gouldner, Alvin W. 1970 The Coming Crisis of Western Sociology, Basic Books, Inc.; = 1975 栗原彬・瀬田明子・杉山光信・山口節郎訳『社会学の再生を求めて』第三分冊 新曜社。
- Habermas, Jürgen 1962 Strukturwandel der Öffentlichkeit — Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft, Neuwied; = 1973 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社。
- 廣松 渉 1972 『世界の共同主観的存在構造』勁草書房。
- Husserl, Edmund 1931 Méditation cartésiennes. Introduction à la phénoménologie → 1950 Cartesianische Meditationen—eine Einleitung in die Phänomenologie, Husserliana, Bd. I, Martinus Nijhoff; = 1970 船橋弘訳「デカルト的省察」『世界の名著』51. 中央公論社
- Husserl, Edmund 1936 Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie; → 1954 Husserliana, Bd. VI, Martinus Nijhoff; = 1970 細谷恒夫訳「ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学」『世界の名著』51. 中央公論社。
- 井上 俊 1977 『遊びの社会学』世界思想社。
- King, Stephen W. 1975 Communication and Social Influence, Addison-Wesley Publishing Company.
- Kosik, Karel 1967 Die Dialektik des konkreten, Eine Studie zur Problematik des Menschen und der Welt, Suhrkamp; = 1977 花崎皋平訳『具本的なものの弁証法』せりか書房。
- Kosik, Karel 1968 中村丈夫訳「現代における人間の危機と社会主義」『現代の理論』1968-10月：54-64。
- Lévi - Strauss, Claude, 1962 La pensée sauvage, Librairie Plon; = 1976 大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房。
- Luhmann, Niklas 1972 Rechtssoziologie, Rowohlt Taschenbuch; = 村上淳一・六本佳平訳『法社会学』岩波書店。
- Lukács, Georg 1923 Geschichte und Klassenbewußtsein — Studien über marxistische Dialektik; = 1975 城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社。
- 真木 悠介 1977 『現代社会の存立構造』筑摩書房。

- Merleau-Ponty, Maurice 1960 Signes, Edition Gallimard ; = 1970 竹内芳郎他
 訳『シーニュ』II みすず書房。
- Minkowski, Eugène 1933 Le temps vécu ; Études phénoménologiques et psychopathologiques, Delachaux et Niestlé, Neuchâtel ; = 1972
 中江高生・清水誠訳『生きられる時間、現象学的・病理学的研究』みすず書房。
- 見田宗介 1973 「まなざしの地獄」『展望』1973-5月：98-119。
- Schutz, Alfred 1962 Collected Papers I, Nijhoff.
- Schutz, Alfred & Luckmann, Thomas 1974 The Structures of the Life-World,
 Heinemann.

(おがわ ひろし)

現象学的社会学研究会 (旧 A. Schutz 読書会)

本研究会では、過去二年間、いわゆる「現象学的社会学」派と呼ばれる、A. Schutz, P. L. Berger, T. Luckmann, E. Goffman 等の著作を読み、検討を重ねてきました。本年度は、主要には、現象学の祖といわれる E. Husserl の諸著作にあたり、「現象学的社会学」派が Husserl を如何に継承しているかの検証を行う予定です。「現象学的社会学」派のたましいに迫ろうというのです。

Husserl と並行して、その他の研究者の成果、検討、参加メンバー各自の問題意識に根ざした個別のレポート（「生活世界」論、役割論、演劇論的モデル、管理社会の問題、知識の分配の問題、子供の自殺 etc.）も行っていく予定です。

連絡先 〒181 三鷹市深大寺4022 井上荘東棟105 小川博司 Tel. 0422-31-6498